



2010年8月号—第8巻第7号

かく語りき—聖人の言葉

「神は泥棒に盗みに行けとおっしゃり、同時に家の持ち主に泥棒に注意せよとおっしゃる」

シュリー・ラーマクリシュナ

「一切は因縁の結ぶがままに有り、一切は因縁の結ぶがままに壊するものである。いかなるものも、それ自体で独立して存在することはない。一切は他のものに関わり合って存立している」

主ブッダ

今月の目次

- ・今月の予定
- ・7月の逗子例会 「アバター—神の化身」 スワームー・メーダサーナンダによる講話
- ・忘れられない物語
- ・日本ヴェーダータ協会創立50周年記念行事閉会式 歓迎の挨拶 スワームー・メーダサーナンダ

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・今月の思想
- ・スワームー、日本ヨーガ療法学会の年次総会に出席
- ・スワームー、シンガポールを訪問

今月の予定

- ・生誕日：
 - スワームー・ラーマクリシュナーナンダ 8月8日(日)
 - スワームー・ニランジャナーナンダ 8月24日(火)
 - ・行事
 - 東京例会（毎月第1土曜日 インド大使館にて）
8月7日(土) 午後2時
 - カルマ・ヨーガ（毎月第2土曜日 逗子協会にて）
8月14日(土) 午前10時
 - 8月の逗子例会（毎月第3日曜日）
8月15日(日) 午前11時
- 皆さまのご参加をお待ちしています。

7月の豆子例会

『アバター—神の化身』スワーミー・ メーダサーナンダによる講話



私は見ていないのですが、皆さんはおそらく『アバター』という映画をご存じでしょう。高額な制作費をかけ最新技術を駆使した3D映画で、大ヒットしました。「アバター」という語はコンピュータの世界では2Dの画像、3Dゲームのモデル、コンピュータ上のユーザの分身を指すユーザネームとしても使われています。また、「アバター」と呼ばれる自己啓発コースもあります。しかし、これらはどれも、インドにおいてアバターが持つ意味やコンセプトを必ずしも反映しているわけではありません。映画に見られたように、別の種族に姿を変えること、すなわち変化・変容などの意味が最低限伝えられているだけです。「カルマ」など、インドを起源とする語句が人々の興味を惹き、誤った意味で用いられることが多いものの多用されるようになったのは

興味深いことです。

アバター (avatar) はサンスクリット語で高いところから低いところへと降りること、降下を意味します。インカーネーション (incarnation) はギリシャ語が語源で、肉体の形を取ることを意味します。ですから、アバターという語には高いところから低いところへ、という概念が、インカーネーションには血と肉の形を取るという概念があるのです。ヒンドウイズムのアバターという概念では、これら二つの意味が組み合わさっています。

神はこの世界の上に位置する天にお住まいで、この世に降りられると「アバター」と呼ばれる、と考えられています。神が降臨される際に何の姿形も取らなければ、人々は神を認識することができませんから神は使命をお果たしになるのが難しくなるでしょう。神は、私たちが分かりやすいように形を取られるのです。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、神が水牛のために姿をお現しになるのなら水牛とされるだろう、とおっしゃったのはこういう理由からです。

宗教的伝統におけるアバター

この「神の化身」という概念は様々な宗教や伝統に見られます。キリスト教にもあります。西洋の有名な哲学者スピノザは、キリスト教における神の化身という概念について、神はすべて

の中に現れているが、完全なレベルで現れているのがイエス・キリストの中である、と書きました。この、「人間の中に、より完全な形で現れている」というのが、ヒンドゥイズムにおける化身の概念です。神は私たち誰の中にも存在していらっしゃり、人間の場合は他の動物よりもその程度が大きいのです。そして、人間の中でも現れの程度がより高いのが賢者であり、イエス・キリストのような人格の中に神の最大の現れを見ることができます。

しかしキリスト教では、イエスは「神の唯一の子」、すなわち神の「唯一の」化身なのです。イスラム教ではイエスも預言者であると認められています。ムハンマドが「最後の」預言者であることを強調しています。では、仏教の教えではどうでしょうか。これまでに例会の講話で神の化身について触れた時、この考え方が一部の参加者の方には異質のもの、聞いたことがないものであるのが明らかに見て取れたのを覚えています。インドでよく話題とされるテーマが仏教に慣れ親しんでいる方々に異質に聞こえたことに、私は少し驚きました。これは、神道や日本の仏教の中では神の化身について語られていないためであるということが明らかになりました。確かに、仏教の教えには神はいません。ブッダは神について説きませんでした。つまり、神がいなければ神の化身もいるはずがないのです。ブッダは純粹意識の現れの

みを信じ、この境地に達する方法を説きました。

しかし、一般の人々にとって至高の实在という概念は理解しがたく、それを信じるというのはさらに難しいものです。人々が困難にあった時、救いを求めるのに人の姿をした神が必要なのです。ブッダは自らこの立場となり、仏教の一般信者には神として礼拝の中心となりました。興味深いことに、ヒンドゥ教徒はブッダを神の化身であると考えています。また、世界の多くの仏教寺院では、ヒンドゥ教寺院で行われているのと同じ儀式が行われています。お辞儀、読経、香を焚く、供物の献上、さらには同一の祝祭などが行われています。また、ブッダも慈悲心から菩薩へと姿を変え、人類を導き悟りの道を示すと信じられています。

ヒンドゥイズムでは伝統的に、神の化身という概念について多くの聖典があり様々な議論が交わされてきました。ウパニシャッドはヴェーダの真髓であり、そのウパニシャッドの真髓がバガヴァッド・ギーターであると考えられています。バガヴァッド・ギーターの第4章7～8節で主クリシュナがはっきりと次のように語っています。

「正法（ダルマ）が実践されなくなり、邪法が世にはびこった時、バーラタ王の子孫（アルジュナ）よ！ 何時でも何処でも私は姿をとって現れるのだ。正信正行の人々を助け、異端邪信の者

どもを打ち倒し、正法を再び世に興すため、私はどんな時代にも降臨する」

神の化身の数

ギーターには様々な解説書がありますが、その中で「神の化身」の概念が説明されています。そこで次の疑問が生まれます。「神の化身はいったいいくつあるのだろう」キリスト教では、イエスただ一人です。イエスの降臨の前には誰もおらず、イエスが再び降臨すればそれはすべての終末の予兆です。ヒンドゥ教の解釈では神には10の化身がいます。

中世の高名な詩人 Jayadeva が作曲した『Dasavatara Stotra』と呼ばれる有名なサンスクリットの賛歌があります。この中でクリシュナは、初め魚に姿を変え、次にカメ、イノシシ、人獅子、矮人、斧を持ったラーマ、シュリー・ラーマ、鋤を持ったバララーマ、ブッダとなり、現在の時代であるカリ・ユガの終わりにはカルキとなって現れてこの時代の周期を終わらせると言われています。ここに進化のプロセスを見ることができます。水中に住む魚、次に両生類、ほ乳類のイノシシ、巨大な人獅子、そして小人、次の斧を持ったラーマはまだ幾分暴力的ですが、やがて理想的な人格のシュリー・ラーマとなり、シュリー・バララームが人間の性質を持ち、ブッダで苦しみを終わらせ最高意識を見出す道が説かれま

す。そして10番目のアバターがカルキで、この学派ではこれ以降に化身は現れないとされています。しかし『Bhagavata Purana』と呼ばれる別の聖典では、24の化身が降臨すると明言されています。

ヒンドゥイズム最高の聖典と言われるバガヴァッド・ギーターには、神は必要があれば何度でもこの世に降臨する、すなわち神の化身の数は無限であると記されています。ある時、クリシュナとアルジュナが散歩に出かけ、アルジュナはクリシュナを至高の実在であると褒め称えました。クリシュナはこれには答えず、代わりに一本の木に近づいて指さすと、アルジュナに何が見えるかと尋ねました。「大きな木が見える」とアルジュナは答えました。「他には？」とクリシュナがさらに聞きました。「黒い実をたわわに付けた木が見える」「違う、もっとよく注意してご覧なさい」クリシュナは言いました。「至高の実在という木に、クリシュナが黒い実となって幾重にもぶら下がっているのが見えるでしょう」この言葉からも分かるように、神の化身は無限にあるのです。

預言者か化身か

次に、このような疑問も生まれます。「預言者と化身の違いは何だろう」例えば、スワミー・ヴィヴェーカーナンダは預言者と考えられています。で

は、神の化身と考えられているシュリー・ラーマクリシュナと預言者であるスワミー・ヴィヴェーカーナンダとはどう違うのでしょうか。主な違いは、預言者の霊的な悟りのレベルは非常に高く解脱を遂げた魂ではあるものの、完全な魂にはまだなりきっていないことです。霊的レベルの高い魂ではあっても、完全の域に達するまではカルマの法則に左右され従うこととなります。一方、神の化身の生死はカルマの法則に左右されるものではありません。

アバターは自らの慈悲心により、人間の姿を取るべく直接降臨されます。しかし、人として生きる間は、神の化身の思想や御業も因果の法則に概ね支配されます。食べ過ぎれば苦しみますし、寝不足が続けば眠気を感じます。病気や快樂、痛みなどの影響も受けません。アバターは人間として生きているのでマーヤの影響も多少受けますが、マーヤがアバターを支配することはできません。マーヤを支配しているのはアバターです。シュリー・ラーマクリシュナは、毒蛇と毒のたとえ話をされています。毒はヘビの体の中にあるけれど、その毒でヘビがやられることはありません。同じように、神の化身の中にマーヤはありますが、神の化身がマーヤに影響されることはないのです。

なぜ神は人となって現れるのか

先ほどお話ししたように、無信仰や

悪がはびこり悪しき者が正しき者より優勢になると、主はその身を人と変えられるのです。束縛に苦しむ人々が自由と解脱を求める時、主は降臨され自由を与えて下さいます。最近テレビなどで「スピリチュアル・ヒーリング」を行う人を見かけますが、これは霊性とは全く関係がありません。このようなことが流行するなど、何が真の宗教であるのか多くの人々が迷う時代になると、主はこの世に降りてこられるのです。人々が霊的な乾きに苦しむ道を示して欲しいと祈る時、この神への渴仰が世界中で起こると、主は私たちのもとへといらっしゃるのです。

神を愛するには

霊的に成長して神を悟りたいのならば神への愛を育みなさい、と言われたら、きっとこう思うでしょう。「神が見えないのに、どうやって愛せばいいの？」夫を愛しているのも、妻や子供を愛しているのも、愛の対象が目に見えるからです。これは当然の、理にかなった質問です。霊的生活でなかなか進歩できないのもこの問題があるからです。神の姿が見えないから神への愛を育むことができないのです。ここに、神の化身が必要である理由があります。人の姿をした神のアバターであれば、人は目に見て愛することができるのです。神の化身を愛することは神を愛するのと同じです。シュリー・ラーマク

リシュナは、神の化身の内側には神のみが存在するのであり、神の化身を愛するのは神を愛するのと同じだとおっしゃいました。ホーリー・マザーも、シュリー・ラーマクリシュナの信者にこうおっしゃいました。「私の息子よ、シュリー・ラーマクリシュナは人の姿をしていらっしゃいますが、その内側は神に他なりません」羽根枕の枕カバーの中には、羽しか詰まっていないのと同じです。

神の化身の目的とは、人々に道を示し、宗教を復興させ、求道者を導き、神を愛し神の叡知を知る方法を説くことです。神はすでに完全であられても、人の姿を取るとやはり厳しい霊的修行をなさいます。シュリー・ラーマクリシュナでさえ、12年間も修行をされました。ブッダやイエス・キリストも例外ではありません。完全な存在として生まれてくる神の化身に、なぜ修行が必要なのでしょう。シュリー・ラーマクリシュナは、自分が行った霊的修行の16分の1でも行えば、人が霊的悟りを得るには十分であるとおっしゃいました。でも、なぜ16分の1なのでしょう。100分の1ではどうなのでしょう。実際には、シュリー・ラーマクリシュナのなさった修行の1000分の1でも実践すれば、解脱は確実でしょう。

無限なる者が有限に生まれるには

シュリー・ラーマクリシュナの時代に科学的知識を持つ者にとっては、悩むべき問題がありました。「無限なる主が有限となって人間の姿で現れることができるのだろうか」という問題です。この件については、『ラーマクリシュナの福音』の中で「M」とスワミー・サーラダーナンダジが大いに議論しています。『福音』の中で指摘されていることの一つに、海に触れたいのなら海岸線の端から端まで指を海水に浸す必要があるか、というものがあります。そんな必要はありませんね。どこか一か所で触れれば十分です。同様に、ガンガー（ガンジス川）に触れたいのであればベルル・マトやリシケシなどで一度触れれば十分であり、川の源泉からベンガル湾まで歩く必要はないでしょう。どこであろうとガンガーはガンガーなのです。どこか一か所で海に触れれば、それで海を見た、海に触れたことになります。同様に、神の化身には神が内在するのだから、神の化身を見れば神を見たと言えるのです。イエスが「私を見たものは父を見たのだ」と言われたのは、この意味からなのです。一粒の滴に無限の青空が映るように、有限の人間に無限の神が映っていらっしゃるのです。

バガヴァッド・ギーターの中に次のような一節があります。「私は生まれることはない。私は永遠である。それでもなおマーヤの力を借りて、人間の姿を取るのだ」マーヤにできることとで

きないことは何か、などと言うことはできません。マーヤにはすべてが可能です。サンスクリットでは「Aghatana ghatana patyasi?」と言います。これは、「私たちはマーヤの中にいるのに、マーヤをどうやって理解するのか」という意味です。

アバターの使命

神の化身には皆、特別な使命があり、人間として現れる前にマスタープランが練られ、お供となるのは誰で、いつどこに生まれ、どうやって神が使命を果たす助けとなるかなどが初めに決められるのです。シュリー・ラーマクリシュナは生まれる前にサプタルシ（七聖賢）のところに行き、そのうちの一人にこう尋ねました。「私と一緒に来てくれませんか」この聖賢がスワミー・ヴィヴェーカーナンダ（ナレンドラ）になったのです。ナレンドラその他、ラカール、サーラダー・デーヴィーなど、偶然に出会ったわけではなく、これらの人々は皆、神の化身がある使命を果たすのに必要なマスタープランの重要な一部だったのです。これは、ラーマ、クリシュナ、ブッダ、イエスなどにも当てはまります。

ブッダが生まれた時代は、宗教による供物の奉獻、宗教儀式という名において多くの動物が不必要に殺されていました。ですから、ブッダの生まれた目的の一つは、動物の殺生を止めるこ

とでした。シュリー・チャイタニヤが生まれた時代は、カースト間、宗教間の抑圧が激しかったため、チャイタニヤの使命の一つは、万人が平等であること、万人を愛することを説くことでした。

アバターの特徴

神の化身にはそれぞれ特徴があります。シュリー・クリシュナの場合は、無執着です。クリシュナは布林ダーバンの牛飼いたちを男女の区別なく愛し、また彼らからも深く愛されました。ゴピー（牛飼いの娘）たちは、クリシュナが布林ダーバンを去りマトウラーへ行くことになった時、クリシュナの乗った馬車のところに集まり、車輪にしがみついてクリシュナを引き留めようとしていました。しかしクリシュナは、呼ばれると一切躊躇することなく涙も見せず、布林ダーバンも友も後にしてただちに去ったのです。神の礼拝の仕方にはいくつかあり、神を師と見て礼拝する他、友人として、子供として、さらには恋人として礼拝する方法があります。これらの宗教的態度のすべては、その理想の形をシュリー・クリシュナの一生に見ることができます。他の化身はどうでしょう。ブッダの特徴は、叡知と慈悲心でした。イエスは、愛、赦し、祈りのメッセージを説きました。シュリー・ラーマクリシュナは、放棄、謙虚、宗教の調和、神の母性に

ついて説かれました。この中でも神の母性については、ラーマクリシュナ以前に説かれたことはありません。

神の母性について、西洋のある信者が興味深い記事を書いています。この信者は、ホーリー・マザー、シュリー・サーラダー・デーヴィーについてアンケートを行い、約300人の信者から回答を得ました。それで分かったのですが、西洋の信者の中ではホーリー・マザーの方がシュリー・ラーマクリシュナよりも人気があったのです。その記事には、シュリー・ラーマクリシュナの時代は終わりシュリー・サーラダー・デーヴィーの時代が来たと書いてありました。西洋人、特に女性の間では、神を父と見るよりも母と見る概念の方が親しみやすいようです。神の化身が聖母をイシュタ（信仰の対象として自分が選んだ神）として礼拝するのはこれが初めてであり、自らの妻を宇宙の母として礼拝するのは先例のない非常にユニークなものです。

このように、神の化身はそれぞれに特徴があり、これらの特徴はその時代やその時代の人々に適したものであるように見受けられます。西洋の思想には「運命の皮肉」というものが見られますが、ここには「認識の皮肉」というものがあります。よくある質問に、「なぜ神の化身の多くがインド人なのか」というものがあります。この答えとして、インドには宗教も多いが悪も多いということが挙げられます。冗談

でよく言われるのですが、インドには悪がはびこっているので神が何度も現れる必要があるのです。しかし、自らの靈性を養わなければ神の化身がいても気付くことができないということも言えます。

アバターの与える影響

神の化身は弟子らを鍛え、自分が使命を伝えた後に弟子らとその使命の遂行を続けられるようにします。神の化身はそれほど長生きができるわけではなく、自らのメッセージを他の人々が伝えられるようにする必要があります。また、たった一人の人間が多くの人々に行ったり様々な民族や性質の靈的ニーズに答えたりすることはなかなかできません。このような仕事により適しているのが、弟子なのです。

神の化身の教えには、シンプルだが深い、という特徴があります。教えについて瞑想すればするほど、より多くの光を得ることができます。また、教えには力強さがあります。なぜでしょう。同じ言葉を靈的レベルのそれほど高くない賢人や普通の人に言われたら、受ける影響は同じではありません。シュリー・ラーマクリシュナは正式な教育をほとんど受けていませんが、偉大な学者や聖人らが師の言葉を聞きに集まってきたものでした。ある学者はこう言っています。「なぜ私がここに来るのか分かりますか。あなたの話すこと

のほとんどを私は聖典で学び、もう知っています。でも、私はあなたの口からこれらの言葉を聞きたいのです」

アバターと霊性があまり高くない聖人とではその言葉の影響に大きな差があります。もし私が、「日本の兄弟姉妹たちよ！」と叫んだとしてもほとんどインパクトはないでしょう。しかし、スワージーが「アメリカの兄弟姉妹たちよ！」と呼びかけた時、その反響は極めて大きいものでした。スワージーの発言は、悟りを得た者の声だったからです。スワージーは誰もの中に同じアトマンを見、それについて確信していたので、スワージーがこの言葉を発した時人々の心は大きく揺れ動かされ、数千人の聴衆が皆立ち上がって二分間拍手喝采したのです。

万物の永遠なる救い主

あることを伝えるために、アバターは物語やたとえ話を使って考えを簡単に表現します。聖書には多くのたとえ話が出てきます。『ラマクリシュナの福音』にも、様々な物語やたとえ話が見られます。象徴化も用いられます。「求めなさい。そうすれば、与えられる」「門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」などは象徴的に考えを表現したよい例です。また、アバターは儀式をあまり重要視せず、宗教の核である霊性により高い比重を置いているこ

とも分かります。彼らの愛は、聖人と罪人とを区別しません。むしろ罪人や苦しんでいる人、心の弱い人たちに心を砕いています。

さらに、神の化身は霊性の大切さを伝えます。まるで果物を手渡すかのように簡単に、アバターは霊性を伝えていきます。アバターは贖罪の力を発揮し、罪人を聖人に変えます。罪人から罪を取り去り、自由で純粋な存在へと変えるのです。クリシュナやブッダ、キリスト、ラマクリシュナの生涯を見ると、このような例をたくさん見ることができます。

文化の象徴としてのアバター

アバターは特定の時代に特定の国に生まれるわけですが、アバターは時代を超え民族を超え万人のために存在します。イエスはキリスト教徒だけのものではありません。ブッダは仏教徒だけのものではなく、シュリー・ラマクリシュナはその信者だけのものではないのです。神の化身であるアバターらは、あらゆる時代、あらゆる国、あらゆる人々のために姿を現されます。生まれた時はそれほど大きな影響はありません。アバターの真の影響力は言わば雪だるま式であり、時の流れとともにどんどん大きくなっていきます。一方、普通の聖人の影響力は急速に薄れていきます。

アバターの影響力は霊的レベルにと

どまらず、社会的文化的な波及力を持っています。イエスやブツダ、クリシュナのことを考えてみて下さい。社会・文化にどれほど影響を与えたことでしょうか。文学、芸術、音楽、舞踊、建築など、世界中に豊かな文化的遺産が存在しています。もしイエスやブツダがいなければ、その数ははるかに少ないものとなるでしょう。世の中には「神の化身」を自称する霊的指導者や弟子がいますが、彼らが本当に神の化身であることはありません。今お話ししたように、アバターとは比類のない霊的現象であり、数百年に一度しか現れない存在なのですから。

今月の思想

「評判とは、自分を他人がどう思っているかであり、

人格とは、自分を神や天使がどう捉えているかである」

トマス・ペイン

忘れられない物語

神様、私をテレビにしてください

小学校の先生が生徒たちに、神様へのお願いを作文に書かせた。一日が終わり、家で作文の採点をしていると、ある生徒の作文に先生は心を打たれた。先生が涙を流していると、ちょうど夫

が入ってきた。「どうしたの」夫は尋ねた。

先生は答えた。「これを読んでみて。私の生徒の書いた作文なの」

『神様、今晩は特別なお願いをします。

私をテレビにしてください。うちのテレビになりたいです。自分専用の場所があって、家族みんなが私の周りにいます。私が話すと、みんな真剣に聞きます。私は、みんなに見てもらいたいです。邪魔されたり質問されたりしないで、話を聞いてもらいたいです。テレビは仕事をしていない時でも大事にしてもらえます。私もそうしてほしいです。

お父さんが仕事から帰ってきたら、疲れていてもお父さんの側にいたいです。

お母さんが悲しかったり嫌なことがあったりしても、私を無視しないで私と一緒にいさせてほしいです。

お兄ちゃんや弟が、私を独り占めしようとしてケンカしてくれればいいと思います。

家族みんなが他のことをそっちのけにして、どんなときでも私と一緒にいたがってるって思いたいです。

そして、私がみんなを楽しませて幸せにしてあげられますように。

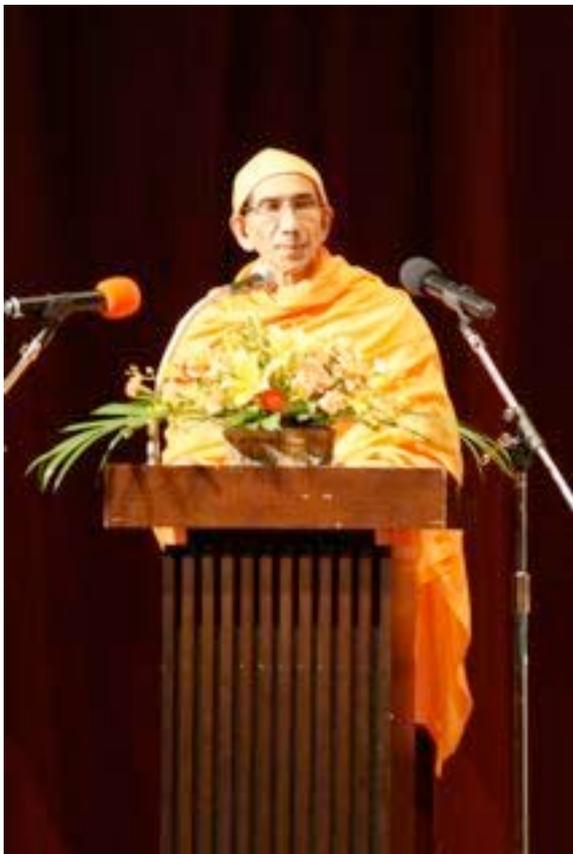
神様、私はたくさん願い事があるわけではありません。ただ、テレビみたいになりたいです』

読み終わると夫は言った。「何てかわいそうな子供なんだ。ひどい親だ！」先生は顔を上げると、夫を見つめて言った。「これは、うちの子の作文なのよ」

(あるウェブサイトより。作者不明)

2010年5月30日

スワミー・メーダサーナンダ
歓迎の挨拶



日本ヴェーダーンタ協会創立50周年記念行事閉会式ならびに第148回スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕記念日祝賀会

日本ヴェーダーンタ協会と祝賀行事

組織委員会を代表いたしまして、インドに本部をまた世界各地に支部をもつ、精神的博愛団体としてのラーマクリシュナ・ミッション並びに同僧院の支部である日本ヴェーダーンタ協会が、創立50周年を迎えたことを祝う諸行事の、この歴史的な閉会式にご参加下さいました皆様方に、心からなる御歓迎を申し上げます。

また本日の閉会式に合わせて行われます、近代インドの愛国的預言者スワミー・ヴィヴェーカーナンダ師の生誕148年目を祝う会にも皆様を歓迎いたしたいと思っております。

さて、本日の会合に御臨席になり、祝福のお言葉を述べてくださるため、本部副僧院長のスワミー・スマラナーナンダ尊師が、はるばるインドからお越しになりましたことを、私達は心より嬉しく思っております。また、岡田武夫大司教様を初め、佐藤良純勸学並びに名誉教授、山口泰司教授の皆様が、それぞれご来賓としてお話くださることになっておりますので、組織委員会一同大変光栄に存じております。

次に、現代インドで最も有名なサントウル奏者であるパンデット・シヴクマール・シャルマ氏とその伴奏者の皆様、またシュリー・カラークリシュナ氏を中心とする有名な舞踏団の皆様が、私共の今日の式典で演奏や舞踏をご披露してくださるとのことですので、これら芸術家の皆様をも心より歓迎いたしたいと思っております。

また、太陽が最初に昇る国である日本におきまして、過去50年間にわたり様々な奉仕活動を続けてまいりました日本ヴェーダーンタ協会が、創立50周年を祝うこの歴史的行事の最後の機会にあたり、当協会が誕生してから今日見られるような姿にまで成長させてくださった関係者の方々に対し、私は心からなる感謝と尊敬の念を捧げたいと思います。

この歴史的な日に当たってまず思い出されますのは、高名な宗教指導者で、かつ国際的に雄弁家として知られていた、ラーマクリシュナ・ミッションの元僧院長故スワミー・ランガナーターナンダ師が、1958年に来日され、インドのもつ精神的・文化的価値について講演されたことでもあります。日本滞在中、同師は東京在住の心あるインド人や日本人に働きかけ、神人である聖ラーマクリシュナやスワミー・ヴィヴェーカーナンダ師が、自分達の生き方を通して示されたヴェーダーンタの教えを、人々に伝えたり実践したりするような協会を設立してはどうかと、勧められました。

こうして、日本ヴェーダーンタ協会は、1959年5月2日、東京のアジア・センターにおいて、米国ニューヨークにあるヴェーダーンタ協会の責任者スワミー・ニキラナンダ師によって正式に設立されました。その時の式典に出席された方々の中には、当時の駐日インド大使C・P・N・シン閣

下を初め、聖ラーマクリシュナやラーマクリシュナ・ミッションについてよく知っておられた木村日紀立正大学名誉教授、著名なインド学研究者の中村元東京大学教授などがおられましたが、協会の初代会長には木村日紀教授が、副会長には中村元教授がそれぞれ就任されました。また駐日英印軍の退役将校であったスミットラ・ラオ氏が初代事務長になりました。私達は、そのラオ氏と、少しあとで協会に入ってこられた中井はる夫人が、長年にわたり協会発展のために尽くされた功績を決して忘れることはできません。なお、本日まことに残念なことは、1988年以降21年間にもわたってラオ氏の後継事務長として協会に尽くしてこられた小菌井正信氏が、昨年の記念行事の開会式で歓迎の挨拶を述べられた後この世を去られたことでもあります。

また私達は、ラーマクリシュナ・ミッションおよび僧団の元僧院長であられたスワミー・ブテーシャナンダ師が、インドから幾度も当協会を訪れ、会員や信者達をご指導くださったことを忘れることはできません。その時の会員や信者達は、今なお同師のことを懐かしく思い出し、深い敬愛の念を抱いております。

また、私達の協会は、1984年にラーマクリシュナ僧院の正式な支部として認められ、スワミー・シッダールターナンダ師が鎌倉の近くの逗子にある支部の正式な常駐の僧として赴任

され、本協会の会長となりました。同師は、ここで大変素晴らしいお働きをなさいましたが、病気のため1993年にインドに帰国され、数年を経ずしてこの世を去られました。本協会の会長として立派なお仕事をなされたこのスワミー・シッダールターナンダ師を、私達は今、ここに敬意と感謝の念を持って想いだしたいと思います。

さて、当協会が設立されて以来50年の月日が経ちましたが、その間当協会を支えてくださった会員や友人や支援者の方々は、数多くいらっしゃいます。協会の維持や活動に協力してくださった日本人や外国人、特にインド人の方々がたくさんいらっしゃいますが、これらの方々の活動に関する簡潔な報告は、本日皆様方に配られました小冊子の中に記されておりますので、のちほどご覧下さい。

また先程申し上げましたように、当協会と東京にあるインド大使館との関係には、1959年に当協会が設立され発足した時の会合に、当時のインド大使閣下が出席されておりますように、非常に深く長いものがあります。それ以来歴代の大使閣下を初め、数多くの大使館員の皆様が、私達の活動を支えてきてくださいました。昨年1月に私がH・K・シン大使閣下にお会いし、今回の祝賀行事の話を持ち出した際にも、閣下は即座に積極的な反応を示され、「スワミージー、あなた方がこの祝賀行事を催すのに必要なあ

らゆる援助をいたしましょう」とおっしゃってくださいました。またさらに、「なぜなら、我々大使達は、インドから来てはまたインドへと帰る東の間の大使ですが、しかしスワミー・ヴィヴェーカーナンダ師はわが国の永遠の大使なのですから」とさえおっしゃってくださいました。

その言葉どおり、大使閣下を初めインド大使館員達、特にサンジャエ・バッターチャリヤ次席大使とパラミタ・トリパティ1等書記官の2人は、1年間にわたって続いた今回の祝賀行事の期間中、開会式の共催や日印関係の起源とその歴史的発展を伝える展覧会の開催に関し、必要なあらゆる協力の手を差し伸べてくださいました。また、本日の文化行事に対し、ニューデリーのICCR（文化関係インド評議会）から財政的援助を得られましたのも、インド大使館の特別な御配慮の賜物であります。

さらに、ここで感謝の念とともに思い出されますのは、事あるごとに協会へ多額の寄付をして下さっていたL・K・チェララム氏、H・K・ガジリア氏、シヴジ・コタリ氏、中井はる夫人の皆様であります。

さて、協会の創立50周年を祝う以外に、私達が今回の祝賀行事を催す主な目的が3つあります。

第1の目的は、ヴェーダによって説かれ、近代の代表的な人物である3人の聖者、即ち聖ラーマクリシュナと聖

母サーラダー・デーヴィーとスワミー・ヴィヴェーカーナンダ師によって実践された、調和と普遍性の教えを、この国日本の出来るだけ多くの人々に普及すること。

第2の目的は、すべての人々の生活に新しい希望と喜びをもたらす精神的な教えと実践の方法を普及すること。

第3の目的は、インド人社会と日本人社会との間にある親善関係をさらに深めること。

以上の3つであります。

皆様は既にご存知のことと思いますが、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ師は、1983年米国のシカゴ市で開かれた第1回世界宗教者会議に出席され、その素晴らしい演説と人を魅了する人格とで聴衆の喝采を浴びたのですが、その船旅の途中、同年の7月に日本を訪問されました。そして滞在中に観察された日本人のもつ多くの素晴らしい特質を賞賛されました。

一方、当時で有名な美術批評家であった岡倉天心が、インドのベール僧院を訪ね、ヴィヴェーカーナンダ師に再び日本を訪問されるよう要請されました。残念ながら、当時既に健康を害していたスワミーの再来日は実現いたしませんでした。この二人の偉人によって培われた日印の友好関係は、その後たびたび日本を訪れた詩人ラビンドラナート・タゴールによってさらに強化されたのであります。

現代に生きる我々日本人とインド人

は、以上のような先人達によって開かれた道を歩み、お互いの幸福のためにさらに多くのことが出来るはず。スワミー・ヴィヴェーカーナンダ師によって設立されたラマクリシュナ教団の支部である私達の協会は、日印関係を築かれた同師や他の先人達の夢を実現するために歩まれた道を、さらに力強く進んでいくことをお約束いたします。こうした私達の努力は、今日の世界にとって最も必要とされる新しい国際指導力、即ち日本人とインド人と中国人というアジアの三大勢力の協力関係を築き上げるのに、役立つものと信じます。

ここで、私は、昨年から1年間にわたり協会創立50周年を祝うために行ってきた他の行事について、簡単にご説明いたしたいと思えます。

まず、昨年6月14日に、インド大使館との共催で同大使館の新しい講堂において、記念行事の開会式が行われました。その際は、私達の協会と深く長い関係をもつ米国西ワシントン地区ヴェーダーンタ協会会長のスワミー・バースカラナンダ師を初め、東京の森一弘司教、前田専学東京大学名誉教授などの御来賓による御講話と素晴らしい文化行事が行われました。なお、この開会式には、社会のあらゆる階層に属するたくさんの日本人と外国人の方々が参加してくださいました。

また、日印関係を築き上げた先駆者としてのスワミー・ヴィヴェーカー

ナンダ師と岡倉天心の2人に焦点を当てた展覧会が、東京の代々木公園で開催された「ナマステ・インディア祭」において昨年の9月26日と27日の2日間公開され、たくさんの方々が訪れました。これは協会によって催された日本における最初の展覧会であり、

なお今年に入ってから、同じ趣旨でもっと詳細な情報を盛り込んだ展覧会が、4月7日から11日までインド大使館の美術品陳列室で、H・K・シン大使の手によって公開されました。幸いなことに、この時は丁度お花見の時期と重なり、インド大使館の前にある千鳥が淵公園の桜を鑑賞に来たたくさんの方々が、私達の展覧会会場を訪れてくださいました。

この2度にわたって開かれた展覧会には、4000人以上の方々が見学に来られましたが、そのほとんどの方々は、日本とインドの間にある長くて深い関係についても、またヴィヴェーカーナンダ師と岡倉天心という人物についても、よく知っておられませんでした。これらの方々の書かれたアンケートに対する回答を拝見しますと、この展覧会の内容と質の高さに感心し、日印関係の様々な面を知って驚き、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ師の素晴らしい人格とその教えに深く感動したことがうかがわれます。

協会はまた、50周年記念事業の資金を集めるため、音楽を通じてインド

文化を紹介しようという目的でパండిット・チャンドラカント・サルデーシュムク博士がその夫人プージャ女史とともに創設された「ダルシャナム」という団体と協力し、昨年の11月27日に、東京の江戸川区にある葛西区民館においてインド古典音楽と舞踏の慈善公演会を開催いたしました。この慈善公演会のため、無料で出演して下さった方々は、シタール奏者のサルデーシュムク博士を初め、サントウール演奏者の宮下節雄氏、タブラ演奏者のクル・ブーシャン・バールガヴァ氏とディネーシュ・チャンドラ・ディヨウンディ氏、クチプディ舞踊のラヌ・バッターチャリヤ夫人、オディッシ舞踊の教師安延佳珠子女史とその生徒である晴美、裕子、すみか、ゆう、の四人の方々が、それぞれ素晴らしい演奏と舞踏を披露してくださいました。

さらに当協会は、インド総領事館の協力を得て、大阪、神戸、奈良を含む関西地域の人々のため、今年の1月24日大阪市の天神ホールにおいて、関西支部の祝賀会を開催いたしました。この会では、在大阪・神戸インド総領事であり、かつオスカー賞を受賞した映画「スラム・ドッグ・ミリオンア(=貧民街の大富豪)」の原作者でもあるヴィカーシュ・スワループ閣下を初め、ムケーシュ・パンジャービ在日インド人商工会議所会頭、溝上富夫関西日印文化協会会長、木村慧心日本ヨーガ療法学会会長の皆様による御挨拶があり、

そのあと文化行事としてインドの器楽演奏や舞踊も演じられました。こうした行事が開かれたのは、関西地域では初めてのことであり、約500名の参加者達が楽しんでくださいました。

なお、この1年間にわたって行われる記念行事を実施ながら、当協会はホームレスの人々に食事や衣料を差し上げる定期的慈善事業も開始いたしました。なぜなら、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ師は、そうして人々を「ダリッドラ・ナーラーヤナ（=貧しい生神様）」と呼んで、そうした人々に仕え礼拝するようにと、私達に助言しておられるからであります。私達は、この奉仕事業を今後も協会の通常活動として続けて生きたいと思っております。

協会創立50周年の祝賀行事の最後を飾る本日の式典は、皆様がご覧になっておられますように、今、清泉女子大学の講堂で開かれております。それで、私達の式典のためにこの素晴らしい講堂をお貸しくださいました大学当局の皆様、また共催を引き受けてくださいました同大学の地球市民学科の皆様、心より御礼申し上げます。また、この講堂で、協会の50周年記念事業に対する御感想と同時に、「平和と調和」という大変重要な課題について御意見を述べてくださる本日の御来賓の皆様にも御礼申し上げ、さらに後ほど文化プログラムの中で演じられる音楽家や舞踊家の皆様の演奏や演技を楽しみにさせていただきます。

なお、今回の記念行事の機会に合わせて、当協会は「ウパニシャド」、「スワミー・ヴィヴェーカーナンダと日本」、「インスパイアリング・メッセージVol.1」、「要約版ラーマクリシュナの福音上巻」、などの書籍と、日本語による「神への賛歌」CDを、既に公刊し販売いたしております。それらに加え、さらに本日は「スワミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯」、「インスパイアリング・メッセージVol.2」、「スワミー・ヴィヴェーカーナ生涯の記録（日本語字幕付き）」DVD、「シヴァ・ヴァジャン — シヴァのマントラと賛歌」のCDなどを公刊いたします。なお、様々な学者や有識者の寄稿論文や協会に関する様々な資料を載せた、本協会の隔月発行の雑誌『不滅の言葉』の創立50周年記念特別号が上梓されました。これら書籍のいくつかは、無料で配布されました。

これまで私が述べてまいりました報告からも容易に御想像がつくかと思いますが、献身的な奉仕者達の持続的な愛に満ちた働きがなければ、このような50周年記念事業を遂行することなど、到底不可能であります。私達の協会は、この国においてはまだごく限られた会員や資金しか持っておりませんので、それぞれ自分の仕事や任務を抱えておりながらも、残りの全ての時間と精力を文字通り捧げてくださった有志者（ボランティア）がいなければ、とても今回の記念事業を成功させるこ

とは出来なかったことでしょう。ですから、その方々に対しては、御礼申し上げるに足る十分な言葉を見出すことができません。もしも今回の一連の行事が成功裏に終わったとするならば、それはひとえにそうした有志の方々のお蔭であります。私は心より、そうした方々に、神の御加護がありますようにと、祈らずにはおられません。

さらにまた、特別記念事業基金にご寄付して下さった方々や、特別記念冊子に広告を出して下さった会社や個人の皆様も、私達がかなり大掛かりに企画し実施した創立50周年記念事業に、多大の貢献をしてくださいました。ただし、今回の行事中の二つの大きな事業目標であった、(1) スワーム・ヴィヴェーカーナンダの銅像を有縁のふさわしい場所設置することと、(2) 東京都内に当協会のセンターを開設するという計画は、まだ残念ながら実現するに至ってはおりません。しかしながら、皆様方の積極的な御協力によって、これらの目標をいつかは実現できるものと信じております。

最後になります。ヴェーダーンタ哲学や聖ラマクリシュナやヴィヴェーカーナンダ師によって維持されてきた、平和と喜びと新たな希望の火を、出来るだけたくさんの日本人の現在の生活の中に届け、インドと日本の両国民間の関係をより一層緊密にしようという私達の目論見は、皆様方から寄せられた全面的なご協力と、私共の三人

の守護者、即ち聖ラマクリシュナと聖母シュリー・サーラダー・デーヴィーとスワーム・ヴィヴェーカーナンダの限りなき恩寵によって、ある程度達せられたのではないかと、思っております。私達は、この創立50周年記念行事が終わりに近づきつつある今、私達の立てた目標を実現するための事業を、引き続き進めていくことをお約束し、皆様方から今後も引き続き御支持と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

これで私の申し上げるべきことはすべて申し上げましたが、もう一言付け加えることを許していただけるならば、この度の祝賀行事に関わったすべての人に一瞬たりとも忘れないで欲しいことがあります。それは、神様が私達の身体を通してお働きになり、私達を御自分の手足となされたということであり、

そこで最後に、トマス・ケンピスの「キリストを見習って」という言葉を引用して、私のご挨拶を終わらせていただきます。「おお、神様！私共はあなた様の十字架を担いでいます。私達がそれを最後まで担ぎ通せますよう、あなたのお力をお貸してください」

皆様方のご清聴に感謝し、今一度本日の祝賀行事にお出でくださった皆様を御歓迎申し上げます。いつかは逗子にある私共の協会をご訪問下さり、様々な行事にご参加くださいますようお願い申し上げます。次第です。

オーム！ 平和！ 平和！ 平和！

スワミー、日本ヨーガ療法学会の 年次総会に出席

昨年7月、スワミー・メーダサーナンダは日本ヨーガ療法学会の依頼を受け札幌市で開催された同学会の会合で講話を行いました。日本ヨーガ療法学会は全国規模の組織で、今年の総会を6月26日金沢市で開催しました。霊的なアドバイザーとして、スワミーは今年も招待を受け、開会の祈りを捧げました。

日本ヴェーダーンタ協会ではこの機会に際し、最近発刊した日本語の書籍『スワミー・ヴィヴェーカーナンダと日本』『インスパイアリング・メッセージ Vol.2』各1200冊を、出席者であるヨーガのインストラクターと生徒の皆様に配布しました。協会では、スワミー・ヴィヴェーカーナンダに関する展示を1日開催するとともに、書籍・CDなどの販売を行い大盛況でした。

スワミー、シンガポールを訪問



スワミー・メーダサーナンダは多忙なスケジュールを調整し、6月22日～7月1日にシンガポール・ラーマクリシュナ・ミッションを訪問しました。滞在中、日本におけるラーマクリシュナ・ムーブメントについて講話を行いました。

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel : 046-873-0428

Fax : 046-873-0592

Web : <http://www.vedanta.jp>

Email : info@vedanta.jp